

マンスフィールドの「カナリア」について

市 橋 弘 道

愛するものを亡くす、これにまさる悲しみが他にあるだろうか。

ひとはこの悲しみゆえに時に自らの死をも思うことであろう。あるいは生きることの意義を見つけれないでただ呼吸し続けるかもしれない。あるいはその悲しみを乗り越えようとさまざまな方策を講ずるかもしれない。それほどに愛するものとの別れは悲しい。

ところが、キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield, 1888-1923) は作品「カナリア ('The Canary')」¹⁾ のヒロインに次のように言わせている。

I must confess that there does seem to me something sad in life. It is hard to say what it is. I don't mean the sorrow that we all know, like illness and poverty and death.

「生きていると何か悲しいことがあるが、それは病とか貧しさとか死といった、私たちみんなが知っている悲しさではない」とヒロインは言うのである。一体ヒロインはどのような悲しみのことを言っているのであろうか。マンスフィールドはヒロインにこのように言わせることによってどのようなことを表そうとしたのであろうか。本稿において「カナリア」をこの問題を中心にすえながら考察する。

作品の考察に先立って、この作品が書かれた当時のマンスフィールドのこと

を知る必要があると思われる。なぜなら、マンスフィールドの作品には多かれ少なかれ作者が投影されているが、「カナリア」においてもそのことは例外ではないからである。さらに言えば、「カナリア」には生身の人間としてのマンスフィールドの心情告白、さらには心境の吐露が描かれていると考えられるからである。

さて、「カナリア」は1922年7月5日に書き始められ7日に書き上げられた。完成された作品としては最後の作品である。つまりこれ以降マンスフィールドは作品を完成させることができなかったのである。しかしほんの半年余前までは作品を矢継ぎ早に仕上げていたのである。前年の10月、33歳の誕生日の14日の夜に代表作である「園遊会（‘The Garden Party’）」を書き上げる。同月30日には「人形の家（‘The Doll’s House’）」を、年が明けて1月には「一杯のお茶（‘A Cup of Tea’）」と「尼になる（‘Taking the Veil’）」を完成させていた。また2月23日には短編集『園遊会その他（*The Garden Party & Other Stories*）』が出版される。そして同年2月マンスフィールドは日記に²⁾、将来1冊に纏めようとして「人形の家」「一杯のお茶」「尼になる」を含む17の作品名のリストを書き残している。同年2月20日にはそのリストにある「蠅（‘The Fly’）」を書き上げた、と日記に記している。このように1922年3月ごろまではマンスフィールドは創作を続けようとする意欲、またそれができるだけの体力気力があつたと考えられる。しかし7月以降作品の完成はなかった。作品名リストに書かれた大半が作品として誕生することはなかったのである。何故か。

その原因は病状の悪化であつた。³⁾ ここでマンスフィールドの病歴を簡単にたどってみよう。1911年夏肺炎（リュウマチとも肋膜炎ともいわれている）を患う。14年再発。17年再再発。18年2月19日咯血。19年体調を崩す。21年健康衰える。この間ヨーロッパ各地に転地し療養に励む。療養し、健康を回復し、作品を書き、また健康を崩す、これの繰り返しであつた。22年1月31日パリにてマヌーキン医師（Dr. Manoukhin）の治療を受けた、と日記に記している。肺結核のためのX線治療であつた。この治療は5月末まで続いたのだが、結果は思わしいものではなかった。8月に再開される予定であつた。し

かしこのころから大きな心境の変化があったようだ。そのあたりのことを夫マリ (John Middleton Murry) が伝えている。彼は1911年にマンスフィールドと知り合い、翌年同棲、18年正式に結婚している。つまり発病し、闘病しているマンスフィールドと10年余に渡って生活を共にしてきているわけである。その彼が1922年5月ごろのマンスフィールドを見て、このように述べている。マンスフィールドは、自分は肺炎では死なない、死ぬとすれば心臓麻痺であろう、ところがこの治療で心臓は悪化した、と固く信じ、

...she had come to the conviction that her bodily health depended upon her spiritual condition. Her mind was henceforward preoccupied with discovering some way to 'cure her soul';...

「身体の健康はこころの状態に依存する、と確信するに至る、そしてこれ以降こころを癒す療法を探すことに専念するようになった」、と。⁴⁾ 実際マンスフィールド自身、10月にもう一度マヌーキン医師の治療を受けてはいるが思わしい結果が得られず、日記に

Haven't I been saying, all along, that the fault lies in trying to cure the body and paying no heed whatever to the sick psyche?

「過ちは、体を治そうとしていること、病めるこころに格別の注意を払わないでいることだと、言い続けてこなかったかしら」と書いている。⁵⁾ そうしてマンスフィールドは友人の紹介で知った精神療法を行っているグルディエフ (Gurdjieff) に期待を寄せ、パリ郊外のフォンテンブローにある彼の施設に入る。この施設は、マンスフィールドの理解では、会員が「こころの再生を獲得しよう」(to achieve a spiritual regeneration) するのを手助けすることを目的としていた。⁶⁾ 彼女はそこでこころの再生を目指して努力するが、しかし約3ヶ月後、1923年1月9日多量の咯血、午前10時30分死去。以上の病歴が示しているように、1922年春以降マンスフィールドは、病状が悪化し、身体

の治癒よりもこころの治療へと向かっていった。このことは、身体の病気が良くなることを断念したことを意味している。さらに言えば、マンスフィールドは自身の死を予感し始めていた、と感じさせるものがある。マンスフィールドの詳細な伝記を書いたアルパーズもまた、この時期のマンスフィールドについて、「まもなく死ぬという思いに日々囚われていた」(...haunted daily by the nearness of death...) と書き記している。⁷⁾ 彼女は己が死の近きことを悟っていた、と思われる。同年8月にはマンスフィールドは遺書をしたためている事実が、この思いをさらに強める。このような時期に「カナリア」は書かれたのである。

ところで先述した作品名リストにはこの「カナリア」は含まれていない。また、前年の10月27日の日記にも作品名リストがあるが、その中にも含まれていない。ということは「カナリア」は1922年春以降に着想された、と考えられる。22年1月末から治療のためパリのホテルにいたマンスフィールドは、2月14日「カナリアたちが鳴いている。」(The canaries sing.) と日記に書いている。⁸⁾ その鳴き声は彼女の部屋の向かい側の部屋から聞こえてきたのであった。そして同月26日友人ブレット (Dorothy Brett) 宛の手紙で、「あなたに捧げる私の物語は「カナリアたち」になることでしょう。」(I think my story for you will be called Canaries.) と述べている。⁹⁾ マンスフィールドはさらに言葉を続けて次のように書いている。

The large cage opposite has fascinated me completely. I think and think about them—their feelings, their *dreams*, the life they led before they were caught, the difference between the two little pale fluffy ones who were born in captivity and their grandfather and grandmother who knew the South American forests and have seen the immense perfumed sea. ... Words cannot express the beauty of that high shrill little song rising out of the very stones. ... It seems one cannot escape Beauty. ... It is everywhere.

マンスフィールドは向かいの部屋の大きな鳥籠に魅了される。そして考える、想像を膨らませる、カナリアたちの感情や夢、捕われる前の生活、そして、捕われてから生まれた二羽のかわいいふわふわした雛と南米の森と芳しい広大な海を知っている雛たちの祖父母との違い、などを。そして、石そのものから湧き立つ甲高い鳴声の美しさにマンスフィールドは言葉を失うのである。この時のマンスフィールドは、目で見、耳で聞いたカナリアたちのことを、また、それらが彼女に喚起したさまざまな感情を作品にしようとしていた、と考えられる。3月19日ブレット宛の手紙で、

My canaries opposite are, of course, in a perfect fever. They sing, flutter, sing and make love

と書き、向かいのカナリアたちが申し分なく元気で、囀り、羽ばたき、愛しあっている様を伝えている。¹⁰⁾ 同年6月4日マンスフィールドは、パリでの治療を終えて10月に再開する予定をたてて、ひとまずスイスのランドーニュ(Randogne-sur-Sierre)へ、7月にはより低地のシェール(Sierre)へ移動する。そしてそこでの掛かりつけの医者診察を受ける。病状がよくなっていることに彼女は驚いた、と夫マリは日記にコメントを書いている。¹¹⁾ しかし前述したように彼女はこころの治療を強く求めるようになっていく。そして「カナリア」にとりかかる。

I should like to write the canary story to-morrow. So many ideas come and go.

「明日カナリアの物語を書きたい。たくさんアイデアが去来する。」と日記に書き、¹²⁾ 7月7日に仕上げています。

出来上がった作品のタイトルは‘The Canary’であり、単数形で表されている。カナリアを初めてパリで見て、その後それについて書こうと思っていた時はカナリアのことを複数形で表していた。複数から単数への変化は何を意味

しているであろうか。カナリアの数の単なる変化ではない筈である。完成された作品には、先述のブレット宛の手紙で述べられていたことのうち、カナリアの鳴声の美しさについては言及されてはいるものの、そのほかのこと、カナリアの感情や夢、二羽の雛、祖父母、などのことは一切書かれていない。この変化はやはりマンスフィールド自身に生じた変化であるに違いない。それは、身体の治療よりもこころ、こころ・魂を治すべきだと強く思うようになっていったことと深く関係している、と思われる。カナリアそのものを書くということから、カナリアに寄せて自分のこころ・魂のことを書くことへと変わっていった、と考えられる。マンスフィールドは、作品を書き上げた1ヵ月後、8月7日に夫マリ宛に別れの手紙を書き、14日にはシエールで遺書を作成しているのである。さほど遠くない将来、やがて自分は死ぬ、この思いを強くいだいて、己がこころ・魂を「カナリア」という作品にマンスフィールドは描いたのである。

では作品そのものに目を転じよう。先ず作品がどのように書かれているかを見てみることにする。この作品は一人の老女の語りで書かれている。つまり、飼っていたカナリアの思い出とそのカナリアが死んでしまった今の心境についての老女の語りでこの作品は成り立っている。初めから終わりまでこの老女が語っている。しかも老女が誰かに語るというのではない。老女の語りを聞く特定の聞き手はいない。たしかに、老女がカナリアに語りかける場合を除いても、‘you’は作品中数度現れる。しかし、それらはすべて特定の誰かを指しているのではなく、いわゆる総称の‘you’である。したがって老女の語りは、誰か他に向かって語りかけるというのではなく、自らが自らに語る独白である。独白であるから当然のことながら、この作品は一人称で書かれていて、書かれている全てのことが主人公の視点から書かれている。このような語りの形式は、自己のこころ・魂の有り様を語るのに適しているといえよう。

「カナリア」は、10のパラグラフから成っている。そして、それぞれのパラグラフは、3つ目のパラグラフを除いて、他は全て省略記号（エリブシス）で始まっている。省略記号は…というふうに3つの点で表される。表記される

と点3つが占めるスペースは短い、その短さの中に表される語り手の想いは「カナリア」の場合深く重くかつ長い、と感じられる。老女は口を開く前に、長い時間をかけて、愛し慈しんで飼っていたカナリアとの心の交流の全てを思い出し、と同時に、自分のところに深く入り込んで、そうしてやっと語り始める、そのようにこの省略記号は感じさせる。老女にとって、口を開くとはこころを開くこと、こころの底にあるものを取り出すこと、であった。まさしく真情の吐露である。

ところで「カナリア」のヒロインを老女と紹介してきた。しかしこの表し方には若干のコメントが必要である。この作品にはヒロインを形容する語・語句、あるいは、彼女を説明する言葉はないのである。彼女の年齢は示されていないどころか、年齢を推定する表現も無いに等しい。たしかに、ヒロインが下宿人たちのことを「彼らは若い」(they are young) と言っている。これとても確かな事を示してはいない。あとは状況から推測するのみである。それとても彼女が下宿を営んでいることぐらいを根拠にするしかないのである。しかしもう一つあるとすれば、それは彼女が日々の生きがいにカナリアを飼っていた、ということである。これとても若い人でもカナリアを飼って生活の慰めにするであろうから、決め手にはなりにくい。したがってヒロインを「一人の女」と紹介するのが無難かもしれない。しかしながら「カナリア」の読者はおそらくヒロインが年輩の女性であると思うであろう。事実研究書などにおいてヒロインは老婦人とか老嬢と表されている。どうしてか。ヒロインの語りを聞いた読者が、ヒロインは若くはない、老いていると感じるからであろう。つまり読者は、ヒロインは年齢の上で老いているのはもちろんのこと、こころにおいても老いている、と読み取るのである。さらに言えば、こころに死を抱いているという意味で老いているのである。その意味で、これまでヒロインを老女として紹介してきたし、以降も老女と表記していくことにする。

もう一つ考えておきたいことがある。それは、「カナリア」において名前がない、ということである。主人公の老女にも、カナリアにも、名前がないのである。他の登場人物である洗濯女にも、中国人の女にも、下宿人にも、名前がないのである。カナリアを売りに来た中国人に名前が無いのは接触の機会が少

ないであろうからまだいいとして、毎週通ってくる洗濯女に名前が無いのはどうしてなのか。また、愛しんで飼っているカナリアにヒロインが呼び掛ける時でも、名前前で呼んでいないのである。カナリアが老女に呼び掛ける場面があるが、その時でもカナリアは老女を「奥さん(Missus)」と呼んでいるのである。また老女が、下宿人たちが自分のことをどう呼んでいるか知っているか、とカナリアに問い掛ける時も、‘Do you know what they call Missus?’ と「奥さん」を用いていて、名前を用いていないのである。下宿人たちも洗濯女らも老女のことを「奥さん」と呼んでいることは推測できるが、その呼び名は名前ではない。ここで「カナリア」は老女の独白であることを考慮に入れてみよう。下宿人や洗濯女らに名前があると、その分彼らには存在感が生じ、老女の独白に外部が入りこむことになり、独白の強さに翳りが生じる、と感じられる。同様にカナリアと老女に名前があって、その名前前で呼びあつたりすると、老女とカナリアの関係に隙間が生じるように、感じられる。名前が無いことによって、独白の強さ、純正さが表現され、特に老女とカナリアの関係が密接であることが表される、と言えよう。このことは、老女がカナリアを「私のもの(mine)」とか、「生活を共にするもの(company)」とか、また、「あの子と私はお互いの生活を分かち合った(he and I shared each other's lives)」と言っていることと呼応している。さらに言えば、カナリアは自分と「同じ感情をいだいている(sympathise)」と老女は感じてさえいるのである。名前がないことによって、老女がカナリアでありカナリアが老女である、老女とカナリアとがところを共有している、ということが伝わってくるのである。

さて次に作品の内容について考察しよう。「カナリア」はどのような物語であるか。それは、愛しんで飼っていたカナリアを亡くした老女がカナリアと共有した濃密な生活を振り返って語る、というものである。老女は先ず、カナリアを入れた鳥籠を吊るしていた柱の釘のことから語り始める。次いでカナリアの鳴声の絶妙さ・美しさについて絶賛する。そして、カナリアを愛するようになるまでに、自宅や庭、花、宵の明星、を愛したがいまひとつ満足が得られなかったことについて、さらにカナリアとの日々の交流をこまごまと述べる。しかしそんな彼女を下宿人たちは案山子と言っていることを彼女は知ったこと、

さらに、恐ろしい夢をみた時にカナリアの鳴声になぐさめられたこと、を語る。次にカナリアが死んだこと、その時の様子を、そして最後に、人生には私たちが知っている悲しみとは異なる何か悲しいことがある、その悲しみをカナリアの美しい鳴声に聞いていたのではないか、との自問で老女は独白を終えている。

では「カナリア」はどのように読まれているか。以下にこれまでに提示されたさまざまな解釈を紹介しよう。各々の解釈は当然のことながらそれぞれ論の流れを持っているのであるが、ここではその全てをではなく要点と思われることのみを提示する。さて「カナリア」を一読すればヒロインが孤独であることはすぐに読み取れよう。特に老女のカナリアに寄せる深い愛情が彼女のどうしようもないほどの孤独を暗に示している。しかしこの作品は唯単に老女の孤独を描いているだけではない。例えば、シルビア・バークマン (Sylvia Berkman) は、

“The Canary,” ... sustains in the monologue form a note of bleak resignation to old age and loneliness:

(「カナリア」は独白という形で老齢と孤独へのもの悲しい諦めの調べを湛えている)

と述べて、¹³⁾ 作品の次の一節を引用している。

... Company, you see, that was what he was. Perfect company. If you have lived alone you will realize how precious that is. Of course there were my three young men who came in to supper every evening, and sometimes they stayed in the dining-room afterwards reading the paper. But I could not expect them to be interested in the little things that made my day. Why should they be?

(・・・伴侶、ですよ、あの子はまさにそれだったのです。申し分のない伴侶。もし一人暮らしをしたことがおありなら、それがどんなに大切であるかはお分かりになるでしょう。もちろん、私には毎晩食事をしに帰ってく

る3人の若者がいます、彼らはときどき食後に食堂に残って新聞を読んだりしました。しかし彼らが私を喜ばせるこまごましたことに関心を抱くなんて期待できませんでした。関心を抱けないのも当然です。）

パークマンの言う諦めが行間に滲み出ているのを読み取れよう。

しかし「カナリア」は孤独や諦念との関連において読まれているだけではない。石塚虎雄は、ヒロインが最後のパラグラフで言及している「悲しみ」（本論の冒頭部分で引用した文中に見える）について、それは日常的次元の、即物的な、具体的な悲しみではなく、人間存在の源基の一部としての悲しみであり、これは形而上学的人生論というべきである、と捉え、

孤独の重層性が非力な人間の記憶や感情を矮小化させる時間の巨大性に媒介された人生論である。人生の本質的属性として、先験的に人生がかかえ込んでいる悲しみの認識である。

と述べている。¹⁴⁾「カナリア」のテーマは孤独の重層性、時間の巨大性、形而上学的悲しみである、というのである。ここでいう孤独の重層性とは、他の人々からの孤立とそれゆえに求めたカナリアの死によってもたらされた孤独の意である。

ところが孤独よりも美に重点をおいた次のような解釈もある。カナリアの鳴声の絶妙さに注目して、クレア・ハンソン（Clare Hanson）とアンドルー・ガー（Andrew Gurr）は芸術との関連において作品を理解している。彼らは、

The canary is a symbol of the artist, ...

（カナリアは芸術家のシンボルである・・・。）

と述べて、¹⁵⁾ 作品から次の一節を引用している。

... You cannot imagine how wonderfully he sang. It was not like

the singing of other canaries. And that isn't just my fancy. Often, from the window I used to see people stop at the gate to listen, or they would lean over the fence by the mock-orange for quite a long time—carried away.

(・・・あの子がどんなに見事に歌ったか、想像もできないでしょう。ほかのカナリアの歌い方とは比にもなりません。それは私だけの思いではありません。何度も、窓から見たものでした、人々が門に立ち止まって聞き入っているのを、また、ハシドイ（ばいかうつぎ）のそばで垣根に寄りかかってずいぶん長い間、うっとりとしているのを。)

そしてさらにハンソンとガーは、美を欠く人生は不完全であること、また、芸術家は唯一無二の存在である、との主張を読み取っている。¹⁶⁾

ナーサン (Rhoda B. Nathan) もまた美の問題を、ハンソンたちとは少し異なった角度から考察して、次のように述べている。¹⁷⁾

Her loneliness is implicit in her attachment to the dead bird, itself a symbol of her yearning for beauty in a pinched sterile life. The nail that held the suspended cage remains on the wall as a symbol of her loss and pain. It is a nail driven through her heart.

(老女の孤独は亡くなった鳥への愛着に暗に示されている、それ自体が苦しい何も生み出すことのない生活における彼女の美への憧れの象徴である。鳥籠が吊るされていた釘が彼女の喪失と苦痛の象徴として壁に残っている。それは彼女のこころを突き通してうたれた釘である。)

つまり、老女の孤独そのものが美への渴望の象徴である、というのである。

さらにまた、ダンバー (Pamela Dunbar) は、

Like others of the late stories it (The Canary) challenges conventional notions of the romantic heroine by focusing on an ageing and

socially disregarded figure and making her the vehicle for a meditation on art, love and death.

(他の後期の作品と同様に「カナリア」は、社会から軽視されている老齢の人物に焦点をあて、彼女を芸術、愛そして死を思考する手段にして、ロマンティックなヒロインについての従来の考え方に挑戦している。)

と述べている。¹⁸⁾ つまり、「カナリア」においては芸術と愛と死が考察すべき問題である、というのである。テーマを複数あるとするこのようなアプローチの仕方を吉野啓子も採用していて、「まずこの作品にはテーマが三つあるように思える。冒頭から順に、死、孤独、そして美が交互に表れていて、この三要素が各々の要素を強調し合っている」として、論を展開している。¹⁹⁾

以上さまざまな解釈を不十分ながら見てきた。そのどれもがそれなりの説得力を持っていることは否めない。しかしながら筆者には、何かが不足しているように感じられる。それは何か。

「カナリア」は作者マンスフィールドが自分の死を予感して、こころ・魂の治療を最も重要なことと考えていた時期に書かれた作品であることを先に見てきた。だとすれば、「カナリア」にはこころ・魂の問題が書かれている筈である。この点についての言及が各々の解釈においては少ない或いは無い、というのが何かが不足しているように感じられる理由である。

では「カナリア」においてこころ・魂の問題はどのように書かれているだろうか。

まず多くの批評家がこぞって言及している作品の冒頭部分を引用しよう。

... YOU see that big nail to the right of the front door? I can scarcely look at it even now and yet I could not bear to take it out.
(・・・玄関の右手のあの大きな釘が分かりますか。私は今でも見る事ができません、抜くなんて耐えられませんでした。)

冒頭に現れる「あの大きな釘」、これこそがこの「カナリア」という作品のテ

一マを示していると考えられる。玄関の柱に打ち込まれた大きな釘。柱と釘、これが暗示しているのは、キリストが磔になった十字架、ではないであろうか。そしてこの暗示がこの作品の性格を示唆している、と思われる。「カナリア」のヒロインの老女にとってこのような釘に掛かっていたのは、何か。それは、彼女のころを最も癒してくれるものであろう。

では何が彼女のころを癒すのであろうか。カナリアが彼女のところへやって来るまで彼女のころを癒していたものについて、彼女は語る。

Of course there was always my little house and the garden, but for some reason they were never enough. Flowers respond wonderfully, but they don't sympathise.

(もちろん、いつも私の小さな家や庭がありました、けれどもどうもそれらはじゅうぶんではなかったのです。花はみごとに応えてくれますが、でも花は私のころと一つにならないのです。)

彼女のころを癒すも、それらは彼女と響き合いころを一つにできるものでなければならなかった。彼女は次に宵の明星 (the evening star) に出会う。そしてそれは、「自分のためにだけ輝いているように (it seemed to be shining for me alone)」彼女には思われた。しかしカナリアがやって来た時、宵の明星は必要とされず忘れられる。そして、カナリアはすぐに彼女のもの (he was mine) となったのである。カナリアは、彼女と響き合い、ころを一つにすることができ、彼女だけを見つめ、彼女のものとなれるものだったのである。そして彼女は、そういうカナリアを愛した。

... I loved him. How I loved him.

(・・・私はあの子を愛しました。どんなに愛したことでしょう。)

そして老女とカナリアはお互いの生活を共有しあった (he and I shared each other's lives)。生活をともにするとは、命を分かち合うということであろう。

愛するとはまさしくそのような関係のことである。そのような生活の中で老女がカナリアに特に魅了された三つの逸話を、彼女は披瀝する。一つはカナリアの見事な鳴声である。

... You cannot imagine how wonderfully he sang.

(・・・あの子がどんなに見事に歌ったか、想像ができないでしょう。)

カナリアの歌声はさながらプロの歌手のそれのようにまことに妙なるもので、通りすがりの人々も長い間立ち止まってうっとりと聞きほれるほどであった。二つ目の逸話は、老女が鳥籠を掃除した後にカナリアが見せる水浴びのようすである。

His bath was put in last. And the moment it was in he positively leapt into it. First he fluttered one wing, then the other, then he ducked his head and dabbled his breast feathers.

(あの子の水浴び用の鉢を最後に入れてやりました。鉢が入るとすぐに、あの子は勢いよく飛び込みました。先ず一方の羽をばたばたさせ、ついでもう一方の羽を、その後頭を水にもぐらせたり、胸の羽に水をかけて濡らしました。)

家事を終え、カナリアと二人きりになった時に台所でおこなう鳥籠の掃除とその時にカナリアが見せるさながら俳優のようなしぐさを、老女はこよなく楽しんだのであった。三つ目は、老女が恐ろしい夢をみたときのことである。冬、雨が激しく降る夜であった。とても恐ろしい夢をみた。耐え切れず、水を飲もうと台所へ。ブラインドの無い窓から暗闇が覗き込んでいるよう。恐ろしい夢をみたの、と伝えることができる人のいないことに耐えられずにいた時、

And there came a little 'Sweet! Sweet!' His cage was on the table, and the cloth had slipped so that a chink of light shone through.

‘Sweet! Sweet!’ said the darling little fellow again, softly, as much as to say, ‘I’m here, Missus. I’m here!’ That was so beautifully comforting that I nearly cried.

(その時微かな「スイート、スイート」という声が聞こえてきました。あの子の箸がテーブルの上にあって、覆いの布がずれていて一条の光がさしこんでいました。「スイート、スイート」とかわいいうちの子がまた言いました、それはまるで、「ぼくここにいますよ、奥様、ぼくここにいますよ。」と言っているようでした。その声に本当に慰められましたので、私はすんでのところで泣き出しそうでした。)

老女がみた夢、それは恐らく、暗闇に覆われた部屋が暗示しているように、自分の死の夢であろう。そんな時に彼女の恐れおののくところを支えたのが、カナリアであった。老女はこの上なき安堵を得たことであろう。

このように老女とカナリアはここを共にした二人だけの生活を享受していた。だがしかしそのような老女に対して批判が生じたのである。その一つは、三人の下宿人による「案山子 (scarecrow)」との批判であった。案山子は、外側は人間の姿をしているが内側にはなにもない。つまり、若者たちは、老女が人間の姿はしているがこころが無い、生きてはいるが死んでいる、と言っているのである。この批判はいわば外側からの批判であった。それゆえ老女はまったく気にもとめない。ところが二つ目の批判は老女自身が言った言葉に表れている。水浴びをしているカナリアに対して老女は、

‘Now that’s quite enough. You’re only showing off.’

(「さあもう十分でしょう、おまえ、見せびらかしているだけね。」)

と言っているのである。そして、カナリアが水浴びを止めて体を乾かし始める。

I was always cleaning the knives by then. And it almost seemed to me the knives sang too, as I rubbed them bright on the board.

(その時まで私はずーとナイフを磨いていました。そして私がテーブルの上で磨いている時ナイフも歌っているように私には思えるほどでした。)

見せびらかしとは、内側にあるもの以上を外に見せることであろう。外側が内側を正しく表していないのである。老女とカナリアの生活の脆さを暗示している、と思われる。しかも老女はこの時手にナイフを持っている。ナイフは、知識・知恵の象徴である。そうであるならば、この批判はやがて老女とカナリアの関係の本当の姿を引き出すことになるであろう。そしてそれが三つ目の批判である。それは他ならぬカナリアの死である。

When I found him, lying on his back, with his eye dim and his claws wrung, when I realised that never again should I hear my darling sing, something seemed to die in me. My breast felt hollow, as if it was his cage.

(私があの子を、仰向けになり、うつろな目をして、爪をぐっと握っているあの子を見た時、もう二度と愛しいあの子の歌声を聞けないと分かった時、私の中で何かが死んだように思われました。私の胸が、まるであの子の籠のように、からっぽになったようでした。)

カナリアは死んでしまった。「仰向けになり、うつろな目をして、爪をぐっと握って」という表現には露ほどの甘さが無い。極めて即物的である。鋭くクールである。しかしそれはナイフのもたらしたものなのである。事実をあるがままに見る目を持った老女は、カナリアを亡くすと同時に自らもまた死ななければならなかった。彼女のこころはからっぽになったのである。

以上が老女の生活、カナリアが来る前とカナリアが彼女の生活に入ってきて亡くなるまでの生活である。カナリアが死ぬまでの老女の、いわばこころの歴史である。そして今、よく磨かれたナイフを持つ老女、事物・事象を事実にくくして見る目をもった彼女は、悲嘆にくれたり自棄になったりはしない。その彼女が次のように語る。

... All the same, without being morbid, or giving way to—to memories and so on, I must confess that there does seem to me something sad in life.

(・・・それでもやはり、病的になったり、あるいは思い出などに身を委ねたりしないで、告白しなければなりません、人生には何か悲しいものがあると。)

しかもその悲しいものが何であるかは言い難い、とした上で、さらに言葉を續けて老女は語る。

I don't mean the sorrow that we all know, like illness and poverty and death. No, it is something different. It is there, deep down, deep down, part of one, like one's breathing. However hard I work and tire myself I have only to stop to know it is there, waiting.

(わたしたちみんなが知っている悲しみ、病気とか貧困とか死のことを、私は知っているのではないのです。そうではなく、それとはまったく別のものののです。それは、そこに、深い深いところに、呼吸のように人の一部として、あるのです。私が仕事をしてどんなに疲れていようとも、立ち止まりさえすればそれがそこにあるのがわかります、待ち構えて、ね。)

病気は辛く悲しい、貧困もまた然り、死は言うまでもない。しかし老女は、それらとはまったく別の悲しみが人生にはある、と言う。そしてそれは、日常生活の真只中において立ち止まって見さえすれば、現れるのだ、と言う。ではそれは何であろうか。それは、老女がカナリアとの生活を通して知ったものである筈である。老女は何を知ったのであったか。それは、事実を事実として如実に見ること・知ることであった。

以上マンスフィールドの「カナリア」をこころ・魂の問題を中心にして考察してきた。ところでハンソンとガーが、

In Mansfield's first-person narratives, it becomes increasingly hard to distinguish an author-narrator separable from the central character-as-narrator ...

(マンスフィールドの1人称による語りにおいては、語り手としての著者と語り手としての作中の中心人物とをはっきりと区別することが次第に困難になっていく・・・)

と述べていることが、²⁰⁾「カナリア」においても当てはまる、と思われる。老女にはマンスフィールドが重なっている、と言えるのである。つまり、カナリアを亡くした老女は死の近きことを感じているマンスフィールドである。マンスフィールドは、魂の治癒の必要性を痛感し、その方法を模索していた時期に「カナリア」を書いたのであった。「カナリア」を書くことでマンスフィールドはどのような答を見つけたであろうか。それは分からない。しかし少なくとも、彼女は老女と同じように、あるがままに見つめる、ということは知ったのではないであろうか。だからこそマンスフィールドは、死の予感から死を受け入れ、「カナリア」を書き上げた約一ヶ月後に遺言を認めたのである。

(亡妻の3回目の祥月命日に脱稿)

注

- (1) テキストは次のものを用いた。

Antony Alpers ed. *The Stories of Katherine Mansfield*. Auckland, Oxford University Press, 1984. 「カナリア」は538-541頁である。作品からの引用は、作品が短いものなので、頁数をあげることはしなかった。

- (2) J. Middleton Murry ed. *Journal of Katherine Mansfield*. Howard Fertig, New York, 1974. マンスフィールドの日記からの引用はすべてこの本からである。以下『日記』と記す。

- (3) マンスフィールドの生涯については主に次のものを参考にした。

Antony Alpers: *The Life of Katherine Mansfield*. Oxford University Press, 1987.

- (4) 『日記』239頁

- (5) 『日記』 249頁
- (6) 『日記』 255頁。
- (7) 『日記』 359頁。
- (8) 『日記』 235頁。
- (9) J. Middleton Murry ed. *The Letters of Katherine Mansfield*. New York, Howard Fertig, 1974. 448頁。以下『手紙』と記す。
- (10) 『手紙』 456頁。
- (11) 『日記』 238頁。
- (12) 『日記』 246頁。
- (13) Sylvia Berkman: *Katherine Mansfield; A Critical Study*. New Haven, Yale University Press. 1959. 182頁。
- (14) 石塚虎雄『マンスフィールド論』（篠崎書林、昭和52年）218頁。
- (15) Clare Hanson and Andrew Gurr: *Katherine Mansfield*. Macmillan, 1981. 133頁。
- (16) 同上。133頁。
- (17) Rhoda B. Nathan: *Katherine Mansfield*. New York, Frederick Ungar Book, 1988. 149頁。
- (18) Pamela Dunbar: *Radical Mansfield; Double Discourse in Katherine Mansfield's Short Stories*. Macmillan, 1997. 71頁。
- (19) 吉野啓子「K. マンスフィールドの「カナリア」にみられる孤独、死、そして美について」（『京都ノートルダム女子大学研究紀要』32(2002).）149頁。
- (20) Hanson and Gurr. 前掲書。132頁。